

チャレンジ・フォーラム 講演 「住民参画によるまちづくり」 studio-L 代表 山崎亮さん

○司会：お待たせしました。それではこれから、山崎様による「住民参画によるまちづくり」の講演に移りたいと思います。

先ほどご紹介させていただきましたけれども、ここで改めて山崎様をご紹介させていただきます。

山崎様は、地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わり、まちづくりのワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、建築やランドスケープデザイン、市民参加型のパークマネジメントなどに関するプロジェクトに携わっておられます。

島根県の「海士町総合振興計画」の取組でグッドデザイン賞を受賞されるなど、ご活躍をされておられます。また、本県におきましても、来年春から開催する「瀬戸内しまのわ2014」の地域イベントの魅力向上への取組にご協力をいただいているところでございます。

本日は、これまで取り組まれた事例をもとに、「住民参画によるまちづくり」について、ご講演をいただきます。住民の皆様と行政が、共にまちづくりを進めていく上で、手掛かりやヒントが聞けるのではないかと期待をいたしております。

それでは、山崎様、よろしくお願いをいたします。

～事例発表に対するコメント～

○山崎亮さん：ご紹介いただきました山崎です。どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

事例発表をした5チームは、それぞれに面白い取組でした。

まずは、呉市の事例です。昭和40年代以前のコミュニティを理想とし、それを目指そうという内容だったと思います。この場合、社会変化をどういうふうに捉えていくかというのが大事だと思います。

今は、まち普請や地域成人式などをされていますが、この昭和40年代以前の地域コミュニティというのを現代的に捉え直した場合に、何をすべきかというのは、様々な地方で共通の課題になっていると思います。

高齢者の居場所づくりは、本当にいい取組だと思いました。手作りで作っていくため、ご本人たちの楽しみにもなっているでしょうし、「癒してあげたい」と思っていた高齢者の方々を迎え入れていたら、いつの間にか自分が癒されていたり、ふるさとの話を聞いているうちに自分のお母さんのことを思い出したりというようなことが生まれているのではないかなと思います。

だから、この活動の原動力は、「誰かのためになりたい」というきっかけで始めたのだけれど、自分たちもちょっといい気持ちになっているのではないかなと拝察しました。

次は、福山市の事例についてです。我々も今、福山市に関わって中心市街地活性化のお手伝いをさせていただいていますが、その中でうずみは何度も食べさせていただきました。本当においしいと思います。いいところに着目したなと思いました。

うずみというコンセプト自体の面白さがあると思います。時代が時代だったので、贅沢できないという中で住民が生み出した英知だったわけですけども、それを現代的に取り込んでいくと、色々なことが生まれてくるなと思いました。

同じグループではないと思いますが、福山の若い男性グループがUZUMENという取組をやっていますね。うずみの精神を男性の下着に入れていこうということで、男の人たちが、パンツ姿の写真とかを撮ってどんどんアップしていく。その男の子たちが着ているパンツがとても派手なのですよ。

だから福山はうずみという一つのコンセプトを手に入れたとすれば、それを現代的にどういうふうに展開していくかという中で、まだまだ色々な活躍が期待できるのではないかなという気がいたしました。

廿日市市の事例は、1年、2年やっていくうちにかなりのノウハウが手に入っているだろうと思います。地域の方々が協力してくれるところに潜む色々な課題であったり、自分の家をオープンにすることにおけるハードルがあったりするだろうと思いますので、ぜひそのあたりを詳しく教えていただきたいと思います。

大阪では、「住み開き」という活動をしている人たちがいます。自分が住んでいるところを一般にオープンにするということで、ちょっとずれた関係性ができて、訪れる人もここ入っていいかなという面白さで中に入っていき、住んでいる人たちも入ってきてもらうための準備をやっている中で色々なことに気付くということがあって、こういう取組はとても面白いなと思いました。チラシにしてもTシャツにしても、コミュニケーションのデザインがなかなかいいなと思いました。

北広島町の取組にもコメントをしたいと思います。多様性を考えるというところから、豊かさって何だろうと考えて、それは結局、自分たちの地域の特性に気付いていくということにつながっているというプロセスが良いと思います。専門家だけではなくて、やはり町民の方々と一緒に多様性を考えていくということがきっかけになって、様々な価値を再発見していくことになっていくのではないかと感じました。

最後の広島県の取組ですね。これは多様な主体が関わっているというのがいいなと思いました。クボタさん、ファーム永田さん、ヤンマーさん、それぞれの主体ができるものを持ち寄って、学外を含めた演習の場を作っている。

僕も大学の教員をやっているのでよく分かるのですが、学生は大学の中だけで演習をしていると、演習のための演習になってしまう。本当に農園をやっている方、あるいは集落の法人の方々とやろうと思うと、そういう甘えは許されなくなります。現場に出

ていくと、緊張感が高まります。学習の効果も高まりますので、学外の人たちと連携して授業をしていくというのは、とても可能性があるなというふうに思いました。

来年の4月から山形市にある東北芸術工科大学という大学で、僕も新しい学科を立ち上げます。今、学生絶賛募集中です。

東北の復興も手伝いながら、地域の人たちの話し合いをどううまくつなげていくのかということのお手伝いをする。そういうコミュニティデザイナーを4年間かけて育てて、その人たちがまたふるさとに戻って、ふるさとを元気にするような仕事に就いてほしいなと思っていますが、この広島県立農業技術大学校の方々と同じように、地域の色々な人たちと協働しながら学習機会をつくっていきたいと思っています。

～泉佐野丘陵緑地パークマネジメント支援の事例～

今日は、自己紹介代わりにこれまで僕たちが取り組んできた事例を、幾つかお話ししようと思っています。

コミュニティデザイン。聞き慣れない言葉だと思いますが、よくまちづくり、地域づくりとどう違うのかと聞かれます。我々はもともと設計をやっていたこともあって、例えば公園を設計した後、「その公園のマネジメントをうまくやってくれませんか」と頼まれて、地域の方々と公園を元気にしていくということをやったり、「デパートを元気にしてくれませんか」と言われてデパートの活動をやったり、医療施設や福祉施設や公民館から依頼が来たりします。

企業のコミュニティ、内部の若手のコミュニティを作ってほしいとか、市役所から頼まれて、「縦割りのセクションを横につないでコミュニティを作ってくれないか」と言われて、行政の中のコミュニティを作るということをやっていたりします。あとは大学ですね。大学でもそれぞれの学科をつないでほしいと言われて、コミュニティデザインをやっていたりします。

ここから幾つか駆け足でお話しします。まず公園とかデパートとか商店街のお話をします。

まず公園の話を1つしましょう。泉佐野丘陵緑地という大阪府の公園のお話です。公園をどういうふうに作るかといった時に、ハードを全部整備するのもいいけど、ちょっと一部だけハード整備をやって、残りは残しておく計画にしました。

それで、我々が作るのとは何かというと、この公園の残りのエリアを作る人たちをつくるということです。チェーンソーで木を切ったり、草を抜いたり、舞台を作ったりする人たち。そのコミュニティを作っていきたいということで、毎年1団体ずつグループを作り、そのできたグループの人たちがここの中の公園を作っていきます。

全体の面積の約2割は行政が作るのですが、残りは全部市民が作っていくというような公園です。毎回、パークレンジャーという養成講座をやっていて、毎年約30人募集します。「公園を作りたい人募集」と募集します。それで集まってきてくれた人たちと一緒に、

木を切り倒したり、道を作ったりして、中に公園を作っていきます。

10年間これを続けると、毎年約30人ずつですから、10年で約300人のチームができていて、オープンした時には、「ようこそ！」と迎え入れてくれる人たちがここにはいる。だから、ハードができるだけではなくて、ソフトでお迎えしてくれる市民活動団体も10団体程度あるという状態を作っていきたいと考えています。

～マルヤガーデンズ コミュニティデザインの事例～

また、公園でこんなことをやっていたら、そういうコミュニティの力をデパート再生に活かしてくれないかって声が掛かりました。そうして、2009年から鹿児島島のマルヤガーデンズというところの仕事を担当しました。

鹿児島の天文館という中心市街地です。ここに三越というデパートがあったのですが、それが2009年に撤退しました。地域からデパートがなくなると、その周りの商店街もすごく力を弱めてしまう。みんな商店街に来てくれなくなるので、やっぱり商業施設が入っていたほうがいいと言っていたら、三越の後にこのマルヤというデパートが入ることになりました。

しかし、もうデパートに行く人が少なくなっているというのが現状です。そんな時代に、デパートをどうするかという問題があるんです。商品とかサービスによる魅力を一生懸命発信するよりも、コミュニティがデパートの中で色々活動することによってデパートに来てもらって、ちょっと帰りに買い物をしてもらうというような人の流れをつくるのがマルヤガーデンズでは大事ではないか、という話をさせてもらいました。

マルヤガーデンズというのは、10フロアあるのですが、この10フロアの中にガーデンと呼ばれる、空いているスペースを1カ所ずつ作ってもらいました。そこに地域の市民活動の団体が日替わりで入ってきては何かいろんなことをやっています。だから1日最大で10団体が何かをやることができます。あるいは午前と午後を切り分ければ、20団体がここで活動することができます。

こういう市民活動団体のファンがここへ来て、帰りに買い物をして帰るということもありますし、買い物をしに来た人たちが料理教室に参加して帰るという流れもできる。これを「買い物集会所」と呼んでいます。買い物ができるような地域の集会所になっていくというのがデパートの今後の方向ではないかと考えています。

～観音寺まちなか活性プロジェクト Re:born.K の事例～

次は香川県の観音寺市の事例です。人口は約6万人です。

この観音寺の商店街が協力して、何とかここを活性化したい、何とか元気にしたいと観音寺市役所に相談に行きました。そして、市役所から僕らのところに依頼があったのです。

僕らはまず現地調査を行いました。歩いてみると、僕たちは先進的な事例を発見したのです。それは、店の中にもう一つ別の店が入り込んでいるという事例です。

これは、全体としては下着屋さんです。下着屋の一角にケーキ屋が入っている。「何でこんなことが起きたんですか？」とお店の人に聞いてみました。お父さんとお母さんは下着屋をやっていた。そしたら、息子がパティシエになった。ケーキ屋を出したいが、空き店舗を借りるのは、リスクが高い。それなら、今ある店に出してみたらということで、息子が片隅でケーキ屋をやり始めたということなのです。

女性にとって夢の組み合わせだと思いました。偶然とは言え、こういう組み合わせをしたというのは、僕は芸術だと思うのですよね。女性がまず下着を買いに行く。気に入った下着があった。買う。そうすると、甘い物が食べたくなりますよね。ケーキを買って帰ります。ケーキを食べる。そうすると太る。下着のサイズが合わなくなる。また下着を買いに行く。ケーキが食べたくなる。これマッチポンプですよね。親子でうまくやったなと思います。誰が企画をしたわけでもないのですが、このようなことが起こっています。

1軒だけではなく、実はそういう店が結構ある。花屋で雑貨屋だけれど、中でカフェをやっていたり、着物屋の中でパンを売っている事例がある。これは多分、歴史的にはこういうことでしょう。1970年代の高度経済成長期に、もう品物を置けば売れるというぐらい商店街の店は繁盛しました。商店街も人と人がぶつかるぐらい人が歩いていた。ところが2000年になって、インターネットで買い物ができるし、郊外に大型店舗もできてきた。お得意様が買ってくれるような商品しかここには並べていない。そんな時に、例えば息子がケーキ屋をやりたいと言って帰ってきたら、お父さんはこの辺の陳列棚を寄せてあげる。そしてそこに息子が入ってくるということになる。これは息子でなくてもいいのではないかと思います。

若い世代で何かお店をやりたいという人がいたら、今のあなたのお店を寄せて、そこに若い世代のお店をもう1個作ってくれませんか。自分のお店がオープンしている間だけ、若い世代にもお店をやらせてみる。若い人が出ていった後、鍵を閉めて帰れば別に不安なこともないでしょう。信頼関係ができるまで1年、2年、その横で別のお店をやらせてやってくださいよというのを、商店主たちに言いました。

そうしたら、商店主たちは、「そうだね。そこからまた若手が出てきてくれて、空き店舗でお店やってくれればうれしいな。」ということになりました。

あとの問題は、商店主たちがどうすれば若手と知り合うことができるのか。若い人と知り合うためには、若い人が好むような会議の形式にしたほうがいい。例えば、商店主たちが集まってワークショップをやっているけれど、一部の商店主は、もうワークショップの会議の途中からソワソワしている。この後、飲みに行くことを期待している。ひどい人になると「まあ、本番はこの後だから」とか言い始める。しかし、若い人たちは、飲みには行きたくない。ランチミーティングなどお洒落なところで、みんなで爽やかに話がしたい。だから商店主たちにワークショップの後、飲み会は禁止と言ったのです。ワークショップが終わった日は、飲みに行かない。でも、未練がましく一人ずつで飲みに行く。ところが居酒屋で一人で飲んでいるのもやっぱり寂しい。ある人がスマートフォンで自分が飲んで

いるところの写真を撮って、フェイスブックにアップしました。「今宵もはじまりました」というコメント付きで。

実はワークショップに参加していた他の店主たちも、実は飲みたかったのです。それぞれ別の居酒屋に一人ずつで飲みに行っていました。フェイスブックを見ていたらある人がつぶやいたので、「あっ、つぶやいた」ということで、みんな自分が今、飲んでいるところの写真を撮っては、みんながアップし始めたのです。フェイスブックの写真の下にコメントがつけられるようになってはいるのですが、そこに「乾杯！」とか言って、みんな会話をし始めました。

みんな一人で飲んでいるのですよ。だから約束は守っているのですが、観音寺の商店街のいたるところで飲みながら会話ができていて、そのうち回数が重なってくると、フェイスブックのページを作りました。「今宵もはじまりました」というページを作って、フェイスブックにグループを作っています。みんなが「今宵もはじまりました」という言葉から話をし始めるというルールで、全国にまで広がりつつあります。講演会でこの事例を話すと、300人ぐらいいると1割ぐらいの人は、早速スマートフォンを出し始めます。フェイスブックで「今宵もはじまりました」と、検索している人もいるみたいですね。グループに参加申請を出してみてください。多分、1分以内に承認してくれます。仲間が欲しくてしょうがないのです。すぐ入れてくれます。そのグループを見るとすごいことになっています。毎晩、飲んでいきますからね。

今宵のメンバーが今宵TVというテレビ番組をやり始めました。これは、Ustreamという動画配信のサイトで、自分たちが酒を飲んでいる様子を配信する番組です。

それをやっていたら、いつの間にか若い人が来るようになりました。今、店主と若い人たちが知り合っています。カフェをやりたい人と雑貨屋をやりたい人が出てきています。それで今、店主たちが誰の店にこの人を入れるかという話し合いをしています。ちょっとずつ、ちょっとずつ、そういう若い人たちと知り合うようになってきました。だから、ちょっといい方向に向かってきています。夜を楽しむイベントをやると、また若い人たちが来るんです。こんな人たちが今ちょっとずつですけれども、営業店舗内で空間をシェアするというようなことを考えつつあるのです。

また、観音寺の店主が、studio-Lの関わっている、他の地域でどういうことをやっているのかを知りたいと言って、今宵シンポジウムを企画しました。他の地域の人たちを観音寺に集めて、事例発表をすることになっています。

～瀬戸内しまのわ2014について～

最後に、「瀬戸内しまのわ2014」についてもお話しておきたいと思います。2014年に瀬戸内に大阪や東京や、いろんな人たちに遊びに来てもらって、そして島を巡っていただきたいと思っています。その時、島々の魅力をそこに住んでいる地域の方々にちゃんと伝えてもらうというようなことをやってほしいなと思っています。studio-Lのスタッフ

が中部と西部と東部に分かれて、10市町の方々と一緒にお話をさせてもらっています。この中にもお世話になっている方がいっぱいいらっしゃると思います。その方々も来年は今宵シンポに呼ばれるかもしれません。瀬戸内しまのわ2014に、ぜひ協力していただきたいと思います。

～まとめ～

こういうふうに、今、お話をしたら、何か面白いアイデアがどんどん浮かんできたと思われるかもしれません。よくそういうふうに言われますが、オリジナルのアイデアというのは、実は無いところから生み出すというわけではないですね。我々はデザイン事務所ですからよく分かります。

プロジェクトを100, 200, 頭に入れないと新しい発想が出てこないんです。その事例を頭の中に入れた上で、組み合わせると、誰もやったことのないようなプロジェクトというのを地域で生み出すこともできますし、つまり全国の中での先進事例ということにもなります。

うちの事務所のスタッフには、いつも言います。新しいプロジェクトをやる時は、まず似た事例をインターネットで100種類集めてくれ。事例シートというシートを作ります。写真を張ったり、経緯を入れたりとか、どんなメンバーがどんな組織体系でやっているのかというのをまとめます。100種類のうち10種類は、本当に惚れ込むプロジェクトが出てくるでしょう。これをよく雑誌や本で調べてくれ。もっと信頼性の高いメディアで出ているはずだから、10種類は事例シートをあと5枚足して深く調べてくれ。この10種類のうち、これは本当にすごいと思うのが3つは出てくるはずだ。これは直接アポイントメントを取って、その団体に話を聞きに行ってくれと。現場の写真も押さえて来てくれ。それでさらに事例シートをあと5枚増やしてくれというふうにしていきます。

だから、この100と10と3というぐらい頭にプロジェクトを入れて、地域に出ていってみんなの話を聞きます。

すると、何と何を組み合わせると、他の要素をどう入れていくと、面白いプロジェクトが出来上がってくるのかというのが、即座に言葉として出てくるようになります。

最後にお伝えしておきたいのは、今日事例発表があったことというのは、皆さんにとってのネタになりますので、よく覚えておいていただきたいなと思います。さらには配付されている事例集ですね。宝の山です。その中に64種類の事例がもう入っていますので、どんどん付箋を張ったりして頭に入れていってもらったほうがいいと思います。ぜひこういう機会を活かしていただきたいと思います。

ちょうど時間になりますので、僕の話提供はこれぐらいにしたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

～質疑応答～

○司会：山崎様，ありがとうございました。

本日，まちづくりに関心のある方が多くご来場されていらっしゃいます。せっかくの機会でございますので，会場から山崎様への質問時間を取りたいと思います。どなたでも結構でございますので，挙手をいただければと思います。いかがでしょうか。

質問者A：講演ありがとうございました。一番初めの公園を市民で作り上げていく事例，大変関心を持ちました。ちょっと疑問に思ったのが，何年後かに動ける市民団体とともに公園が開かれるということですが，その市民団体の方の年齢を考えると，世代交代というか，持続性を持たせるための仕組みや工夫をされているのだと思います。そのことを教えていただけないでしょうか。よろしくお願いします。

○山崎亮さん：ありがとうございます。

まさにおっしゃるとおりです。こういうコミュニティを作る場合，持続可能な形にしていこうと思った時に，モデルにしているのは体育会のサッカー部とかラグビー部ですね。大人の部活みたいにしていこうといつも思っています。

僕はラグビーをやっていたので，ラグビー部の例えしかないんですけど，例えばコミュニティができました。公園の例であれば，パークレンジャーができ，30人のチームができました。まず，自分たちで部活のキャプテンを決めてもらわなきゃいけないです。だから，部活のキャプテンを自分たちで決められるかどうかというのを，まず見ています。1点目が自分たちで部活のキャプテンを決められるかどうか。これはリーダーと言ってもいいでしょうね。リーダーを決められるかどうか。話し合いでちゃんと決めてくださいというのはお話しします。

2点目は，日々部活の練習をちゃんとやれるかどうかです。先ほどお話したように，事例をちゃんと調べながら自分たちのプロジェクトを面白い方向にどんどん，どんどん，持っていけるかどうか。これも見ています。

3点目は，練習試合をちゃんと自分たちで組んでいるかどうかです。これは，地域の中のイベントなど，少し自分たちの中の社会実験をやってみたいと思うものを，自分たちで準備してイベントとしてやれているかどうか。社会実験としてやれているかどうかです。練習だけをやってもしょうがない。面白くないので，実践として練習試合ができていますかどうかです。

4点目は，全国大会にちゃんと出ようとしているかどうかです。自分たちの取組を先ほどの日本計画行政学会に例えば応募してみるとか，あるいはふるさと何とか大賞みたいなのに応募してみるとか。応募してみると，自分たちの活動が全国大会の中で，どの辺にあるのかというのがよく分かります。こういうチャレンジ・フォーラムに例えば応募してみるとか，こういうのもそうです。ちゃんと全国大会に出ようと思っているかどうか。これ

もこのコミュニティの中で大事なことです。

そして最後。新入生勧誘をやっているかどうかです。部活は、毎年4月になったら新入生をどんどん勧誘します。ラグビー部に入れよとか、サッカー部と取り合いをしています。情報発信をして、ちゃんと新しいメンバーを誘うということを意識的にやれるかどうかですね。

もう一つ、もし加えるとすれば、ちゃんと卒業する時期を決めたほうがいいと思います。4年生になったら卒業する。3年生になったら卒業すると同じように、ずっと同じリーダーがやっているのではなくて、卒業の仕組みをそのコミュニティの中に内在させておくと、何年目かで必ずその人は卒業して、アドバイザーとか相談役みたいなのところに入ってってもらいます。その人は日々の活動に来なくていいんですけども、こっちが何か相談したい時には相談に行けるような、部活の顧問みたいな立場になってもらいます。それを一体何歳とするのか、あるいは何年とするのか。これもそのコミュニティの中で決めておくことが必要になってきます。

さらには部費です。部費をちゃんと集められているかどうかです。これは継続するための資金、活動資金です。これも必要になってきます。

そうすれば、ちゃんと新しい人も入ってくるし、新規事業のための練習をしていますし、新しいプロジェクトを自分たちで生み出していく力を持つようになりますので、そうなったらコミュニティデザイナーなんていうよそ者がその地域にいる必要はないだろうと思っています。

その持続可能な仕組みをどういうふうにコミュニティの中に埋め込んでおくかというのが、我々の仕事の中では結構大事な所だなというふうに思っています。

○質問者A：ありがとうございます。私もラグビーをやっているのですが、とてもよく分かります。

○司会：ありがとうございました。他にいかがでしょうか。

○質問者B：今日はどうもありがとうございました。

山崎さんから、行政の横のつながりのデザインをしていただけるという話を聞いたんですが、職員の中に山崎さんのファン、若いファンがたくさんいます。ちょっと今日のフォーラムとは関係ないのですが、うちに来ていただいて職員の研修をしていただきたいと思います。ちょっとお願いをしてみました。よろしくお願ひします。(拍手)

○山崎亮さん：ありがとうございます。そういうご依頼をいただくのは非常にありがたいと思っていますし、研修の内容をちゃんと考えて、1日の研修でいきなり変えるってなかなか難しいので、それをどういう仕組みで研修をきっちりやっていくのかというのが大

事だと思えます。

面白い組み合わせ方だなと思っているのは福山市です。福山市は先ほどのうずみのプロジェクトの発表がありましたけれども、一方で我々が関わっているのは、「Fネット」という、福山市役所の中の若手職員で、課を越えて市民活動を応援するチームというのを作らせてもらっています。

この人たちは、自分たちで勉強会を開いたり、うちの事務所まで自費で研究に来たりとかということ活動を活動し始めている、庁内コミュニティが出来上がっています。このように何か具体的なプロジェクトがあったほうが成長すると思えます。

市民の中に入って行って、実践で学んでもらったほうがいいというふうに思っていますので、実践とセットでやられるのがいいんじゃないかなと思います。市役所の人たちが地域に入って行って、地域の協働の現場で鍛えられていくということがいいんじゃないかなという気がします。ありがとうございます。

○質問者B：ありがとうございました。

○司会：ありがとうございました。そろそろお時間となりましたので、質問はここまでとさせていただきますと思います。山崎様、どうもありがとうございました。

○山崎亮さん：どうもありがとうございました。（拍手）